

(第4期:2017, 18, 19年度)

2019年度沖縄大学外部評価委員会(第4期)議事録

日時: 2020年1月27日(月) 18時30分~20時15分

場所: 沖縄大学本館2階会議室

出席委員: (委員長)比嘉康春、(副委員長)越野康成、石原地江、平良肇、松永勝利

資料 1 2018年度沖縄大学外部評価委員会意見に対する対応について

2 第五次中期計画重点課題に係る事前評価

3 第五次中期計画全学計画「基本戦略」に係る評価指標・目標値

4 全学と学科のDP(学位授与方針)とCP(教育課程の編成・実施方針)

5 2019年度学習成果の測定とそのとりまとめ

6 内部質保証の方針と手続及び2019自己点検・評価の工程

7 2019自己点検・評価報告書(案)

8 OKIDAI VISION 2028 2019-2028 & 第五次中期計画 2019-2023

1 開会挨拶(盛口満 学長)

本日は沖縄大学の自己点検・評価に係る外部評価委員会にご出席いただき誠にありがとうございます。本委員会は3年任期制であり、今回がこのメンバーでの最終の委員会となる。

本学は、次年度に大学基準協会の認証評価を受審するため、今年度は「自己点検・評価報告書」に取り組んできた。本日はその報告書についても報告をさせていただく。

前回の本委員会では、私は副学長として、忌憚のないご意見を皆様からいただいたことを思い返し、この度も、ぜひ様々なご意見を頂戴したく、どうぞよろしくお願いをいたします。

2 委員長挨拶(比嘉 康春 委員長)

沖縄大学の外部評価に関わるようになり、新聞記事に沖大のことが載ると関心を持って読むようになった。最近、46名もの教員合格者を輩出されたということで、私も身内のように喜んでいる。教職課程の先生方、教職支援センターの先生方にお祝いを申し上げる。

昨年から入試改革のことでいろいろあるが、来年からは入試改革と大学改革が加速しそうな状況だ。そういう中で最も重要なことは、大学の内部質保証だと思う。今回の自己点検・評価についても、内部質保証にかなりのエネルギーを注力されていると思う。報告書を読んでそう感じた。それについて何らかのお役に立てればというふうに思っている。

先ほど学長からお話があったように、今回で私たちの任期で最後の委員会となる。前回までと変わらない活発なご議論、意見提起をお願いして、私の挨拶としたい。

3 第五次中期計画の一年目について(盛口満 学長)【資料1, 2, 3】

昨年3月4日に、前回の外部評価委員会を開催した。昨年は第四次中長期計画の最終年度にあたり、第五次中期計画案も報告をさせていただいた。少し、振り返りをさせていただく。

本学の中長期計画は、もともとは学長任期と連動した3年間の計画だった。しかし、中計をより沖縄大学の理念の実現に向かうべきものとする改革案が、仲地前学長時代に策定され

た。それが、沖縄大学の理念である沖縄大学憲章をどのように実現するかについて、まず10年後の沖大の姿を見据えた長期ビジョンを策定し、その長期ビジョンにしたがって、前5年、後5年の二期の中期計画を策定し実行に移すという中長期計画の再定義だった。

沖縄大学憲章を実現すべく、10年後の沖縄大学を展望した沖大ビジョンが2018年度に策定された。「地域共創・未来共創の大学へ」という大学憲章を基にし、OKIDAI VISION 2028は「地域がキャンパス、地域のキャンパス」と謳っている。これは創立70周年を迎える2028年度の沖縄大学の在りたい姿となる。

この沖大ビジョンは、4つの重点課題と4つの基本戦略から構成されている。重点課題とは沖縄大学らしさの実現だ。

- 1・沖縄大学という場：多様な人々のホットスポット
- 2・沖縄大学の教育・研究：持続的発展を目指し、地球と地域の課題に挑戦
- 3・沖縄大学の学生像：大学と地域を行き来する、未来を語るフィールドワーカー
- 4・沖縄大学の新たな共創への挑戦：時代と地域の要請に応える大学

加えて4つの基本戦略は、大学としてあり続けるための基本的な施策の方針だ。

- 1・志願者の獲得
- 2・中退者対策
- 3・社会接続
- 4・大学運営

各部署の施策は、この4つの重点課題、4つの基本戦略に沿ったものだ。今年度は第五次中計の初年度で、実施状況のとりまとめは次年度前期に行う予定になっている。そのため、成果物の用意はできていないが、現状について前回の外部評価委員会でいただいたご意見への対応とあわせて報告をさせていただく。

(1) 教員の自己点検・評価活動の共有について

今年度は、後で報告をするように、認証評価の受審年を控えた年ということと、認証評価の重点が自己点検・評価活動にあるということもあり、この半年以上、様々な会議体で自己点検に関する議論が行われ、教職員の自己点検に関する認識や共有度は例年に比べて高くなったと思う。新たな仕組みとして、今年度は以下のような改善を行った。

一つは学生の学習成果の可視化について。これは後程教務部長から具体的な説明がなされるので割愛する。もう一つは教員の教育成果に関する自己点検・評価の仕組みだ。これは従来の報告書では不十分であると考え、今年度末から、ティーチング・ポートフォリオの視点も取り入れた報告書を導入することを決定した。大学全体の学位授与方針等についての点検は、先日、中小企業家同友会の方々との懇談会も行い、ご意見を伺い、今後、その内容を大学運営等に反映させていきたいと考えている。

(2) 中退対策について

中退者の調査から、初年次教育に鍵があると判断し、今年度は入学オリエンテーションの改善、新入生の4月の演習における欠席者への対応を行った。中退対策委員会を立ち上げ、問題点を整理し、夏の教職合同研究会で報告、共有した。次年度以降の対応として、特に法経

学部におけるリメディアル教育に関する改善を決定した。大学全体として、低学力の学生への面談の取り決めを確認した。なお、さらに学習支援対策の検討が必要だと認識している。

(3) 中退が危ぶまれる学生と社会の接続について

このご意見に対しては、具体的にはまだ進展がないが、中小企業家同友会との今後の懇談などの中で反映させていきたいと考えている。

(4) 留学生の減少について

純粋な留学生増はないが、留学生とその他の学生との交流イベントが国際交流室の主催及び後援会の支援で盛んになっている。また、新たにオーストラリアに提携校を探し出すなど、学生の海外留学先の開拓も継続して行っている。

(5) 重点課題の評価について

専任教職員のアンケートで評価するということに、評価をいただいた。これについては第五次中計の事前評価として、重点課題と基本戦略の両方を試行的に実施した。重点課題について投票の多かった施策の上位は次のようなものになった。

- ・「学生スタッフ中心の学生募集」（入試広報室）
- ・「4年一貫ゼミの活性化」（法経学科）
- ・「学科行事への学生のさらなる参加」（こども文化学科）
- ・「ハラスメント教育などの拡充」（学生支援課）
- ・「学生による地域の子どもへの教育実践の拡充」（こども文化学科）

これらを見ると、学生を巻き込んだ大学運営、学生に主体的な取り組みを促す施策が目立つように思う。

こども文化学科でいうと、例年、「学校ごっこ」という、1年生が地域の子どもたちを招いて、一日、「学校」を真似たイベントをしているが、今年はアネックス共創館を利用し、さらに地域の学童に呼びかけを行うことにより、例年に比べて参加人数がぐっと増え、活性化した。これは、「重点課題」の「沖大の学生像」「沖大の教育・研究」とからみ、地域をキーワードとする本学の理念を実現に近づける成果の一つであるといえるのではないかと思う。

また、ハラスメント教育に関しても、教職員への研修だけでなく、今年度、学生向けのパンフレットの作成も必要であるという認識から、その作成に取り掛かっている。

FDに関しても、教務部長から報告があると思うが、学生の委員との合同会議が行われた。

このように、教職合同、学生の主体的な関わり、地域との協働、等々このような観点で、第五次中計が具体化されつつあるというのが、総括的なまとめとなる。また、4月には、地域から要望の声が大きかった、沖縄初の管理栄養士養成の目的学科を擁した健康栄養学部が開設され1期生を迎えた。

以上のように、新たに掲げた長期ビジョンを望み、中期計画を策定し、大学憲章の実現に向かって行っている現状を報告させていただく。

4 3つの方針を踏まえた適切性に係る点検・評価について（吉本篤人 教務部長）【資料4、5】

沖縄大学の3つの方針について、全学と各学科の内容とそれらが相互に整合していることの説明がなされた。また、今年度から始めた学習成果の測定方法について詳細な説明がなさ

れた。説明の後、下記の質疑応答があった。

越野：3つのポリシーは非常によくできている。特に、学習成果の可視化では、ルーブリックを準備してうまく対応している。正直、すごいなという感じがする。2年次修了時には60単位取得することになっているが、これを満たさなければ進級できないのか。

吉本：本学に進級要件はない。2年次修了時に60単位は取っておいてほしいという目安だ。その後の履修の資料にしたい。

比嘉：ルーブリックを使った評価を始めて、学生の反応はどうか。

吉本：学生は自己評価をよくわからずにやっているようだというのが正直なところだ。自己評価の後、面談をして到達度を確認するが、簡単なことではない。今後、学内の様子を把握していきたい。

小野：学生にとっては、何を指すのかを確認する機会になっていると思う。

比嘉：このような取り組みで、例えば中退予防や進路の相談にも使えるのではないか。

越野：この評価結果は、担当教員が活用するのか。それとも学科で共有するのか。

吉本：各学生の点数を出すのではなく、集計結果から学位授与方針の達成度を分析する。個別の学生の学習成果を学科内で共有するという事は、現状では考えていない。共有するべきかもしれないが、学科の規模にもよると思う。

石原：評価方法についての説明を聞いて、評価がしやすくなったのだろうと感じた。学生も慣れたらできるようになると思う。卒業研究については発表できるよう努めるということだが、どういう場を考えているか。

吉本：現在、学科内で卒論発表会を実施しているので、そうした場を想定している。

比嘉：授業評価の高い先生に対する懸賞はやっておられるが、成績優秀な学生に対する懸賞制度といったことはやっておられるか。本学の場合、優秀な成績を修めた学生や学外での芸術活動で高い評価を得た学生に対する懸賞制度が荣誉あるものとしてモチベーションになっている。

吉本：本学でも卒業式で授与する創設者や学長、学部長の賞はあるが、それらが学生のモチベーションにつながっているだろうか。

盛口：賞の趣旨や基準が学生によく伝わっていないのかもしれない。

比嘉：中退の状況は改善されているのか。

盛口：劇的な改善はない。調査によって、授業についていけないケースや入学時から大学生活に馴染めないケースなど初年次の躓きが多いということが分かってきていたので、この1年、オリエンテーションでの取り組みや4月当初からの面談に力を入れるなどしてきた。次年度からは入学前でのいろいろなやり取りやリメディアル教育にも力を入れたいと考えている。こうした取り組みが複合的に効果を出していくと考えている。4年生一貫ゼミや「沖縄大学論」を活用したキャリア教育で学ぶことの意味づけも行いつつある。

5 2019 自己点検・評価報告書（案）について

(1) 「沖縄大学の内部質保証の方針と手続」

(2) 自己点検・評価活動と報告書作成のプロセス（金城直樹 事務局）【資料6】

認証評価制度の概要、「沖縄大学の内部質保証の方針と手続」の内容、同方針と手続に則り

自己点検・評価活動と報告書を作成してきた流れについて説明がなされた。

(3) 大学基準1～10の検証結果について(小野啓子 副学長)【資料7】

現段階の「2019自己点検・評価報告書(案)」に基づき、各章の自己点検・評価について概要説明がなされた。

上記(1)(2)(3)についての説明の後、下記の意見や助言等があった。

比嘉: この報告書は認証評価のためのものだが、質保証の点検というものは毎年行っていかねばならない。今、そういうシステムを構築することが大学に求められている。

越野: 私は同業者なので、状況はよくわかっている。これまでの説明を聞いて、また全体を見た感じで、今の時期にこれくらいのものでできていれば、後はもう少し頑張ればできるのかと思う。あえて言えば、資料の付け方などはマニュアルに沿った形にし、後は小野先生がおっしゃった内容を根拠づけていく作業になるのだろう。今の時点でここまでできていれば、いいのができるだろうというのが感想だ。

もう一つ、第2章の内部質保証は重要な項目だが、今説明していただいた内容ではかなりきちんとしているという感じを受けた。ただ、「評価者の視点③」では、改善・向上の具体的な事例を挙げる必要がある。

石川: 中身は素晴らしいと思うので、完成に向けて頑張ってもらいたい。企業の取り組みを一つ紹介すると、中小企業家同友会では経営の成長度を測るために毎年約50項目のチェックリストを用意し、中間管理職以上の社員にチェックしてもらい経営者の認識との差異を探していくということをしている。経年の変化も見られる。例えば学位授与方針の達成度で、学生が2年後や4年後にここまで到達しようという目標設定をしてしまうということも考えられるかもしれない。そういうことをすると、ルーブリックの表に慣れていくのかもしれない。企業では、そういうふうにして社員が評価に馴染んでいくことも行っている。

比嘉: 現代沖縄研究科の慢性的な定員割れに対して、なかなか対策が見いだせないというところがあるが、同研究科は沖縄大学の一つの特色だと感じているので、もったいないという気がする。

平良: 留学生も少ないが、県外からの学生が少なくなっているようだ。沖大の魅力がなくなっているのではなかろうかというのが率直な感想だ。以前のような活気もなくなってきた。中国についてトータルに研究し、教育に生かしていくような特色を伸ばしていただけたらと個人的には思っている。長期的には、今後海外から留学生が増えるだろう。本土に向けても沖大がここにあるとアピールするような、そうした対策もやっていただければと思う。

比嘉: 今日は重たいテーマで、なかなか意見も出しづらいかもかもしれない。途中休憩も入れないでやってきたので、この辺りでいかがでしょうか。

6 学長コメント

忌憚のないご意見をありがとうございました。前半では3つの方針や学習成果の可視化についてたくさんのご意見を頂いた。「よくできている」「評価しやすくなったのではないかな」という評価を全体的に頂いた。同時に、ルーブリックは学生の自己評価だけでよいのか、教員の関与、情報の共有などについてご指摘を頂いた。初年度ということもあり、こうしたルーブリックの内容をどう把握し、改善していくかが今後の課題だと改めて認識した。

中退対策は引き続き重要な課題だと認識している。初年次教育の中で大学4年間の学びと今後の自分の人生をどう作っていくのかというキャリア教育にも関わる支援を考えていきたい。

その他、成績優秀者の懸賞制度などを用いて学生の学びのモチベーションを作るというご指摘も覚えておきたい。

後半の認証評価に関しては、現時点ではよくまとめられているというふうな総合評価を頂いたと思う。また、内部質保証の位置づけが重要だがこれも全体的にはきちんとしているのではないかという評価を頂いた。課題としては、本学の自己点検でも出たことだが、マイクロとミドルの関り合いが役割分担も含めて不明確なところがあり、ここを明確にさせていくことが必要だと気付かされた。

チェックシートに関しては、到達目標を示すやり方についてご助言をいただいたが、今年度実際にやってみて来年度以降の検討課題にしていきたいと思う。

その他、大学のこれからの改組等に関して、一つは大学院が発展していく方法について宿題を頂いたと思う。国際コミュニケーション学科の改革については、昨年度もご意見を頂き学科の方で検討したが、当該学科の考え方もあり、それも尊重したいので引き続き課題として捉えておきたい。県外からの進学者については、公立化をすると授業料が低くなり県外学生が増えるということがあり、本学においても例えば那覇市立ということがあり得るのかという話は出ている。一方で、公立化によって県外者が増えると県民のための大学という位置づけはどうなるんだという考え方もあり、引き続きの検討課題となっている。学生からすると授業料は安い方がよいし、多様性を保持するという考え方からも県外学生がいた方がよい。こうしたことも検討課題だと改めて思わされた。自宅から通う学生は増えてきており、財政的な面が大きいと思う。4月からの高等教育の一部補助でどうなるかまだ読めないが、本学では希望している学生が多いので、多少なりとも学生の負担が軽減されることになればと期待している。

多様なご意見を頂き感謝している。いただいたご意見は、今後全学教員会議などでも活かしていきたいと思う。

7 閉会挨拶（照屋正 常務理事）

本日は、お忙しい中ご出席くださり有難うございました。また貴重なご意見を賜り、心よりお礼申し上げます。ご承知のように、大学は地域の人材を輩出し、地域社会の発展にとって重要な役割を担っている。私どもは地域から求められる大学になるべく、日々精進しているところだ。毎年8月から12月にかけてAO入試や推薦入試を行っているが、今年の志願者数は合計842名だった。前年同期の志願者数571名の1.5倍となった。昨年も前年同期の1.3倍増加した。沖縄大学への注目度が着実に高まってきていると認識している。

一方、それだけ大学の質的な充実度がますます重要になってきている。本日、このような評価委員会を開催し、委員の皆様から貴重なご意見を頂けることを大変にありがたく思っている。皆様には改めて心より御礼申し上げます。本日は長時間にわたりありがとうございました。

以上（記録：後藤）